
包帯

森野青果

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

包帯

【Nコード】

N8088M

【作者名】

森野青果

【あらすじ】

三年生が寮を出た日、ぼくたちは死んだ美術部の先輩のことを思い出した。誰もいない三階に上り、開かずの間の前に立つと……

午後になってシノブが訪ねてきた。

足音やドアの開けかたで、すぐにわかったけれど、ぼくは画集から目を離さなかった。細く開けた窓から時折、入り込む風が、カーテンをひるがえした。気怠い陽射しが、部屋を少しの間、明るませ、かすかな花の匂いとともに、また薄い闇に溶けた。

さつきからぼくを悩ませていた、油絵の具のにおいは、いつの間にか消えていた。

シノブの声が背中ではびつた。

「ケンジは？」

ルームメイトの名を口にしたら、彼は野球部で、今朝も暗いうちからグラウンドに出ている。背を向けたままそう告げると、わざと怒ったようにシノブは言う。

「あいつら、ユニフォームのまま食堂に来るだろう。いやなんだ。汗臭くて、飯がまずくなる」

ぼくは肩で笑ってみせた。ゆっくりとページを一枚、めくる間の沈黙。肩に手を置かれるまで、彼の喘ぎに似た戸惑いを楽しんでいた。

「三年生は、さつき、みんな寮を出た。さっぱりしたぜ。だれもここへは、来なかっただろう？」

ぴくりと震えたのが、かれの指に伝わったろうか。だれも来なかったのは、確かだ。ケンジは昼食も食堂で済ませ、暗くなるまで戻らないだろう。それでも、すぐに肯定できなかったのは、彼があらわれるずっと前から、背中に刺すような視線を感じていたから。

だから、振り返るのが恐ろしかった。

「心配になって見にきたの？」

顔を向けると、不意をつかれたように、目をしばたかせた。そ

のことを恥じ入ったのか、いつも古めかしい不良気取りの少年は、花のように頬を赤くした。

「ちがう！」

たちまち眼に蒼い怒気を浮かべて、シノブは力まかせに、ぼくの肩を引き寄せた。椅子が傾き、思わず洩れた悲鳴は、彼の唇でふさがれていた。床に落ちる画集の音が、とても遠く感じられた。

森の中の遊歩道を、肩を並べて歩いていった。

風はやや冷たいけれど、陽射しは温かい。スケッチブックを抱えた小脇が、汗ばむのがわかった。

「寮長に呼び出されちまって。一時間だぜ」

「喧嘩？」

「いや。お礼参りに来るような骨のあるやつは、一人もいなかったな。今年の卒業生は、どいつも腰抜けさ」

一学期の間は、シノブの体に生傷が絶えなかった。それも、原因の九割はぼくなのだ。

シノブとは、中学三年生の時から付き合っていた。もちろん、恋人として。

アイデンティティの懦弱な子供たちは、当然、二人を変態呼ばわりした。ぼくは無視することで、シノブは拳にものを言わせて、迫害者を視界から消した。

この林間学校のような、男の子ばかりから成る高校に入ると、これまでとは全く異質な敵に取り囲まれた。かれらは主に三年生で、目をつけた一年生をいち早く「ものにする」ゲームに熱中した。恋人のあるなしは関係なかった。

シノブは自分の流儀に忠実にふるまい、何度も職員室に呼び出された。停学に至らなかったのは、教師たちも内心、上級生たちのゲームに眉をひそめていたからだ。さすがに一年近く過ぎると、周囲はすっかり静かになっていた。

遊歩道をそれで、木立の中に分け入った。数歩先から、朽葉を踏

みかためたような細い道が、ゆるやかな勾配に沿って続く。弾む息づかに混じって、水の音が聴こえた。

不意に視界が開け、木々に囲まれた空間に出た。テニスコートひとつぶんくらいの広さ。丸太を割った椅子とテーブルが、ワンセットだけ取り残されているのは、かつてここがキャンプ場だった名残りだという。向こう側の木立から湧き水があふれ、テーブルの下を潜って、今ぼくたちが出て来た方へ注いでいる。

「汗をかいた？」

テーブルに片手をついて、シノブが尋ねた。彼の背後で、常緑樹の梢が、絶滅した巨獣の背中のように蠢いた。ぼくはスケッチブックを開き、鉛筆の先をかれに向けた。

「べつに。それとも、調べたい？」

また怒られるかと思えば、案に相違して、彼は目を伏せた。不安そうな表情が、紙の上に写された。寮長に呼び出されたと言ったことが、あらためて気にかかった。

「二学期にひと悶着あったのは、確かだからな。あいつはまだ、おれを疑ってるんだ」

「なんのこと？」

「人間先輩の事件さ。まだ片付かないそうじゃないか」

蠟細工のような、人間先輩の美しい顔立ちが脳裏に浮かんた。彼は美術部の部長で、誰もが天才とみなしていた。展覧会の賞を総なめにし、秋には銀座での個展が予定されていた。

人間先輩の死には、ぼくがかかわっていた可能性がある。

彼は、菊井というルームメイトと恋人どうしだった。菊井さんは三年生にはとても見えない、小柄で幼い顔立ち。全校生徒公認の仲で、美術室では人間先輩に影のように寄り添う姿が、垣間見られた。どうやら美術教師が、ぼくの名前をたびたび口にしたらしい。授業で描いた水彩画が人間さんの目に止まり、放課後、美術室へ寄るように誘われた。絵を描くのは大好きだが、クラブに属するなんて、

考えただけで虫唾が走る。けれど、入部を強要されることなく、好きな時に好きなだけ教室を使える特権を得た。

先輩はぼくにとつて、ただの親切な人だった。菊井さんがぼくを見るとき、哀しそうな眼差しに気づくまでは。

やがて菊井さんが先輩に「ふられた」という噂を聞いた。実際、かれを美術室で見かけなくなったし、人間先輩は顔を合わせるたびに、思いつめたような表情を見せた。心ない噂を流す者も出てきたので、ぼくの足はしだいに美術室から遠のいた。

とはいえ、同じ学校に通い、そのうえ同じ寮生とくれば、どうしても顔を合わせずには済まされない。ひと気のない廊下で何度も腕をつかまれ、赤い痣をつけられた。唇を奪われそうになったことも、一度や二度ではない。するうちに、夜な夜な部屋の前の廊下から、不審なもの音が聴こえ始めた。

ついにある夜、ぼくは電気を消したまま、忍び足でドアに近づいた。ケンジは上のベッドで寝息を立てていた。ことり、とドアの鳴る音を聞いたところで、おもいきり押し開けた。一瞬、亡霊だと信じた。痩せこけた頬。黒く縁取られた目が、驚愕に見開かれた。

「菊井……さん？」

彼は這うように廊下を逃げ去った。みしみしと階段を駆け上がる音を、呆然と遠くで聞いた。

「何か、困ったことでもあったのか」

次の日、さすがに見かねてシノブが尋ねた。噂ならとつくに聞いている筈だ。けれど、彼なりの心遣いなのだろう。ぼくが黙っているうちは、知らん顔で通すつもりしかった。人間先輩とすれ違いざま、シノブが拳を握りしめるのを、何度も見ているけれど。

ぼくは事情を話した。話しながら涙を抑えきれなくなった。彼の胸にすがりつき、どうか先輩を殴らないでくれと懇願していた。

シノブはぼくの頼みを決して無視しない。決して先輩を殴っていないことを、今でも確信している。その日の昼休み、校庭の隅で話

している二人を、何人かの生徒が見かけている。言い争っている様子はなかったと、誰もが口をそろえた。

人間先輩が行方不明になったのは、同じ日の夕方だった。

最初の夜は待つことに費やされた。翌日になって教師が総出で探したところ、寮から一キロも離れていない森の中で、人間先輩の変わり果てた姿が発見された。

全身黒焦げだった。

ほとんど無意識に、ぼくたちは湧き水の流れてくるほうを見た。あの木立を百メートルほど進んだところに、人間先輩は倒れていたという。蠟細工のようだった白い肌を、無残に焦がして。

人間先輩は頭から油絵用のテレピンオイルをかぶり、火をつけたようだ。当初は焼身自殺とみなされたが、解剖の結果、首を絞められた痕跡が発見された。

「ただし、致命傷はあくまで火傷なんだよ。首を絞めて気を失ったところで、火をつけたとか、そういうわけでもないらしいんだ」

何度も事情聴取を受けているため、シノブは事件に詳しい。首を絞めたのはおまえだろうと、執拗に問い詰められるうちに、催眠術にかかったように、自分がやったような気がしてきたという。むろん、彼は否認し続けたが。

スケッチブックごと、彼の哀しそうな表情を閉じて、テーブルに腰かけた。シノブは横に立ったまま、ぼくの太腿にもたれた。さらさらと掌を上下させながら、かれはつぶやく。

「実際、変な噂が後を絶たないんだ。生存説まであるくらいさ」「そうなの？」

声が震えたのは、決して愛撫のせいばかりではなかった。かれはしがみつくように頬を寄せた。

「状況や血液型から、人間先輩だと断定されたけど、顔も何もかもめっちゃくちなわけだろう。百パーセント本人かどうかは、誰にも

わからない」

「ちよつと、うがちすぎじゃないかな」

「うん。ただ、これを最初に言い出したのが、菊井さんといったかな。先輩の恋人だったルームメイトなんだ。間もなくノイローゼになって、入院しちゃったけどな」

「菊井さんが、見たというの？」

顔を上げて、シノブはうなずいた。少年らしい真摯な眼差しが、怯えの色を帯びていた。

「人間先輩たちの部屋が、B-304号。この部屋は、菊井さんが出てから、ずっと空き部屋のままだよ。美術の実績を買われて、ほかより広くて、日当たりのいい部屋を宛てがわれていたからね。多少イワクつきでも部屋替えを希望する三年生が、何人かいたらしいけど……」

ある三年生は、ルームメイトとウマが合わず、渡りに船とばかりに部屋替えを申し出た。勇気あるところを、仲間に見せつけたい下心もあった。

みような噂は、もちろん聞いていた。部屋の中から、少年の囁き声や、笑い声、それに悲鳴などが聴こえるとか。包帯を全身に巻きつけた人間先輩が、夜ごと、部屋の中をござごと這い回るといいう噂に至っては、荒唐無稽もいいところだと、笑い飛ばした。

意気揚々と荷物を運びこんだ最初の晩、彼は様子を見に来た仲間たちを追い帰り、ドアに鍵をかけた。十二時過ぎに部屋の電気が消えた後も、悲鳴やもの音を聞いた者はいなかった。けれど翌朝、日が高くなっても、その少年は一向に部屋から出てこなかった。

ノックをしても返事がない。寮長が呼ばれ、合鍵が持ち出された。彼がどういう状態で倒れていたのか、誰も話したがらなかったため、詳しくは伝わらない。ただ、その三年生は、いまだに精神病院から出てこない。

「ねえ、シノブ……」

うつむいたまま、つぶやいた。彼の視線を、痛いほど頬に感じた。

それでもぼくは、湧き水の流れから目を離せずにいた。日はだいぶ傾いたけれど、まだ夕刻には間がある。

にもかかわらず、流れは血の色に染まって見えた。

「その部屋へ案内してくれる？」

廊下は肌寒く、妙に、しんとしていた。昨日から春休みに入っていたので、寮に残っている一、二年生は、半数に満たないだろう。

三階へ上がると、シノブの言ったとおり、人の気配はまったくなかった。摩りガラスの窓が、所々、割れていて、校舎から、好き勝手に吹き鳴らされる管楽器の不協和音が、途切れがちに入りこむ。ひとつの棟を通り抜け、角を曲がろうとしたとき、突然、腕をつかまれた。

「どうしたの」

蒼ざめた表情ごと、ぐつと近寄せて、彼は声をひそめた。

「音が、聴こえただろう？」

「えっ」

「壁を内側から、ばんばん叩くような」

彼の視線を追うと、こちら端のドアとぶつかる。何も聴こえない。ドアの脇には「B - 304」と記されたプレートがかけられ、その下に入るべき入居者の名札はなかった。

冷たい風が、廊下を吹き抜けた。

いつのまにか、ぼくたちは手をつないでいた。

肩を触れ合わせたまま、ドアの前に立った。耳を済ませたけれど、シノブの息づかいが聞こえるばかり。把手に手をかけた瞬間、彼は呻き声とともに、床にうずくまっていた。ばちつと音をたてて、蒼い火花が飛び散るさまを、はつきりと見た。

「シノブ!？」

傷ついた指を腹に押し当てたまま、強いてかれは笑みを浮かべた。眉間に皺を寄せた額に、前髪がべったりと貼りついていていた。

「ただの静電気さ。春先には、よくあることだ……」

右手の指は紫色に腫れあがり、爪の間から血が流れていた。シャツの腹の辺りも、真っ赤に染まっている。ぼくは彼の肩を支えて、医務室へ向かった……

真夜中になっても、ケンジは戻らなかった。

外では風が強まったらしく、古びた鋳物の窓枠が、がたがたと揺れた。クラブのミーティングが続いているのだろ。彼を待つことをあきらめ、電気スタンドを消した。蒼黒い闇の中、手探りして、ベッドの下段にもぐりこむ。もの憂げな夢の欠片たちが、すぐに眠りへと誘いに来た。

何かが触れていた。

テレピンオイルのにおいがした。

体は眠ったまま、わずかな意識と、その部分の感触だけが目覚めていた。つまぐるように、戸惑いがちに、まさぐりながら……包帯を巻かれた指が直に肌に触れている。蠢いている。

身を擦ろうとしても体は動かず、反対に意識は研ぎすまされてゆく。執拗に繰り返される、古拙な音楽にも似た指の動きを嫌悪しながらも、肉の芽の中に、羞恥と歓喜の波が繰り返し押し寄せ、ぼくは咽からほとばしる断続的な呻き声を、抑えることができなかった。

「やめて……シノブ……」

すつ……と、感覚が遠退いて、闇の中に、まばらな包帯のかたまりが浮かんで見えた。すぐ目の前にありながら、なぜかとても遠く感じられた。そうして意識を失う直前、包帯の隙間から覗く蒼白い眼差しを、たしかに見た。

翌朝、ベッドの上段から、ぐっすり眠りこんでいるらしい、ケンジの寝息が聴こえた。霧がかかったような、朦朧とした意識のまま、ぼくは着替えて外に出た。シノブは部屋にいた。

「だいじょうぶなの？」

ルームメイトは、今朝早く家に帰ったという。彼は左手だけを使

って、インスタントコーヒーを器用に淹れた。右手の指はすべて包帯で覆われていた。

「思った以上にひどいよ。痛くてさ、スプーンさえ握れないんだぜ」
白い指を蠢かせて、そう言うのだ。

ぼくはコーヒーカップを床に落とした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8088m/>

包帯

2011年9月12日03時35分発行